

## 『ハイデガー講義』から脱構築へ

デリダの思索の道

大江倫子(東京都立大学)

ジャック・デリダの1964-1965年講義録『ハイデガー—存在の問いと歴史』は、当時仏訳されたばかりの『存在と時間』を、ハイデガー中後期著作の観点から解釈するという独自の構造を示しており、中後期著作の仏訳の先行というこの時期のフランスの特異なハイデガー受容状況を反映するとともに、この直後に開始されるデリダの企図、差延と痕跡による脱構築の基盤をなすものである。講義の副題「存在の問いと歴史」は『存在と時間』の意味深い位置ざらしとみることができ、後期ハイデガーにおいて「存在」の語が抹消されること、時間の主題が歴史に移行することを示唆するとともに、こうした移行の運動そのものを根源的差異(差延)として主題化する哲学を目指している。

講義序論部では、『存在と時間』で言明された伝統的存在論が隠蔽してきた根源的経験への遡行と、後期著作における命運的終末論的に到来する存在の本質を問う存在の問いとの連続性から、伝統的形而上学の解体が哲学の肯定的可能性として一貫して目指されていることを素描し、この探求のための手がかりとして、存在の前了解の必要、諸学の基礎づけとしての存在の問い、存在論の語の断念、旧来の形而上学が思考しなかった差異の根源的概念を提示する。この存在論の語の断念の根拠として、旧来の存在論が存在者性一般の存在を思考したが存在の真理を思考しない、すなわち哲学の根源的問いを問うことに成功しなかったことを『存在と時間』『ヒューマニズム書簡』の読解から示す。これに対しハイデガーの提起する存在の問いは、問いの一般構造に準拠しており、学的研究全般の基礎であり、プラトンが『ソピステス』で提起した存在のアポリアに応答するものであるだけでなく、歴史の思考の徹底化に接近する条件となることも予告される。

講義第一部ではこの存在の問いについて、『存在と時間』の論述の前提条件となる現存在と言語について、権利上循環がなく、解体しようとしている伝統形而上学からの負債もないことを検証する。通常的思考では問い一般に言語が先行していると考えられるが、存在の問いは存在の真理から存在者の意味を可能にする格別の問いであり、『ヒューマニズム書簡』で「言葉は存在の家」といわれるように、存在と言語は特殊な共属関係にある。存在の意味が言語の可能性の条件であるとともに、存在は言語のなかでのみ現れることで、存在と言語はそのような格別の関係にある。もう一つの前提現存在は、ただ存在の問いを問うことだけを条件とする新たな人間規定であり、「ロゴスをもつ動物」という古典的人間規定や近代哲学の主体対象関係を前提しない。それどころか存在の意味の明確な概念以前に存在者を規定可能であり、存在の意味がすでに現にあって、問いの可能性のうちで告知されることが含意されている。これは循環や矛盾ではなく、現存在の生起の結果であり、歴史性であることが示される。

講義第二部では以上的前提から帰結するハイデガーの歴史性が検証される。現存在がその存在の意味から歴史と世界の意味を知ることが歴史性の条件である。世界は存在するのではなく、現存在の超越と自由に基づいて世界化するのであり、現存在が世界史に先行している。また現存在の歴史性は歴史

学にも先行している。歴史哲学と歴史学は何らかの歴史的真理を前提しているが、このような歴史的客観性への問いの手前で前提される歴史的真理の可能性、これがハイデガーのいう現存在の歴史性である。このように現存在の存在の意味が歴史学を可能にするのであれば、ハイデガーの存在の意味をヘーゲル、フッサールの存在の意味と比較することで三者の歴史性の差異が顕わになる。ヘーゲルでは無歴史性が民族固有の特性に固定されること、フッサールでは近代主観性、人間主義、学の理念、生活世界が特権化されることにおいて、こうした諸観点を世界像としてその一般構造を記述しえたハイデガーの優位が示される。

講義第三部では以上のようなハイデガーの歴史性が、現存在の時間性からいかに導出されたかを『存在と時間』第2編第5章の読解から検証する。第72節では、現存在の生を誕生から死に至る有限な伸張と把握することが歴史性の隠された根拠である。ここにおいて生じる意識の運動、すでにありながらまだないものへの超越、存在者の知と存在論的知の比較がGeschehen生起である。ここにこそ非現象を現れさせ、現前の特権性を揺るがすハイデガー歴史哲学の根源的条件が集約されているとデリダは了解する。ここにおいてデリダは「三つの指摘」として、ハイデガーのこの企図の継承を可能にする新たな哲学の方向づけを提示している。第一に非現象性を現象させること、第二にレヴィナスの痕跡の主題系の練り上げ、第三に現在と現在の現前の意味そのもの、存在の意味の隠蔽、隠蔽の歴史、すなわち形而上学の歴史を主題化することである。他方で『ヒューマニズム書簡』のハイデガーによる回顧的解釈と転回の必要性を参照しながら、デリダは『存在と時間』における歴史性の主題の行き詰まりについて、主観性放棄という別の思考を遂行する語法の困難さから時間性で基礎づけ、積極的具体的に歴史を語ることはなかったとみる。その後転回によって時間性の主題は消失し、歴史性の主題は時間性から解放され、現存在の歴史性と共属する存在史として浮上することになる。これにより本来性や決意性の倫理形而上学的準拠が抑止され、二項対立も確立しなくなり、脱存と現存在がもつ還元不可能な受動性が歴史のアプリオリとして顕わになる。第73節では歴史の通俗概念を分析し、その根が主観性概念にあることが示されているが、ハイデガーにおいては、近代主観性が現存在の歴史性を変容させるのである。第74節では形而上学的語法の範囲内で試みられた本来的動性としての自己伝承、決意性について、デリダは『カントと形而上学の問題』における自己触発、『形而上学入門』におけるロゴスの根源的暴力性の観点から、主観性を抑止する独自の解釈を示している。以上を要約すれば、他者としての時間性を構成する有限な自己触発的時間性が歴史性的実存論的構造を可能にすることで、現在は未来から構成する所産となり、決意性の自己伝承性が共同運命を開きうることになる。第75節ではこのような現存在の脱存から世界史が可能になること、第76節では歴史家の脱存に基づくアンガジュマンにより歴史学が可能となることが示されている。

デリダの解釈において以上の読解から『存在と時間』は、後期思想の主題である存在の退隱の本質、言語の開示的隠蔽的本質と一貫して読解でき、隠喩性との連関が示された。